

離島生徒の学力向上のための新たな挑戦

— 5年間の支援事業を通して —

A New Challenge for Improving the Academic Ability
of Students' on an Isolated Island
— Through A Five Years' Support Project —

軸丸 勇士 (教育福祉科学部)

【要旨】

姫島村は1島1村から成る大分県で唯一の村である。その村教委と中学校は生徒の学力向上のために「夏休みふれあい学習会」と名付けた支援事業を5年前から夏期休暇中の1週間連続して行ってきた。それを担当したのは大分大学の学生と筆者であり、島に泊まり込んでの実施であった。

この事業に当時生徒として参加し、現在大学生となった者が、その良さを実感して自ら支援者（チューター）となって後輩である中学生の学習支援を大分大生と一緒に始めている。ここでは5年間の取り組みを紹介し、新たに始まった循環型人材育成の方法と今後の展望について述べる。

【キーワード】

生徒 (junior high school students), 大学生 (university students),
学習支援 (supporting junior high school students in their studies),
循環 (circulation), 人材育成 (training people)

1. はじめに

1. 地勢と産業

姫島村は平成18(2006)年3月の近隣市町村との合併に参加せず、独自路線を歩いているため大分県で唯一の村である。村は大分県の北東部、国東半島の先端(東)にある国東市国見町の伊美港から、村営フェリー(姫島丸)で約20分(6km)の位置にある1島1村から成る離島である。島の面積は6.85km²(東西7km 南北4km, 周囲17km), 島の中央には矢筈岳(267m), 西に達磨山(105m), 北に城山(62m)があり, 村の山林原野の総面積は2.39km²(35%)を占める。島の平坦部は主に宅地(45ha), 田(18ha) 畑(182ha), 雑種地(83ha) やその他(118ha) として使われている¹⁾。

島周辺は水産物の好漁場であるため, 村の主な産業は漁業である。その漁業も江戸時代から現在まで住民が自主的に「漁業期節を定め, 乱獲を避け, 魚族の育成(時期や場所, 漁具や方法など)に努めた」²⁾ ため, 魚や海藻資源の維持にも有効にはたらい, 他の漁協では急激な減少傾向にあるのにも関わらず, 村の漁獲高はほぼ一定に保たれている。

島は瀬戸内海の西端に位置するため年平均降水量が約1,300mmと少ない。これを利用して, 昭和

45（1970）年頃までは漁業と同じ基幹産業として製塩業があった。しかし、国の製塩業の方向転換により廃止されたため、現在その跡地 40ha（村面積の 6％）は車エビの養殖場として利用されている。

村は少雨量のため飲料水などが不足気味であった。そのため水源地の確保やダムの築造により上水道が整備され、配管布設替えや浄水能力の向上などが行われたことにより、平成元（1989）年からは安定供給ができるようになった。それに伴い、周辺海域の水質保全のために下水道工事が平成 10（1998）年に完成し、普及率 100％を達成した。その他、空き缶のデポジット制度の導入や村民一斉清掃なども積極的に行われており、環境に配慮した村となっている。

その様な環境の中で平成 18（2006）年 4 月 1 日現在の人口は 2,606 人（男 1,227 人、女 1,379 人、世帯数 948）で、世帯数は殆ど変わらないが、人口は年に約 55 人の割で減少傾向にある（図 1）。

産業別従事者数（合計 1,377 人）の割合は一次産業 32％、二次産業 24％、三次産業 44％であり、このうち一次産業（漁業及び水産養殖業が中心）が年に 1％の割合で減少傾向ある¹⁾。その様な理由もあって、村では漁業以外からの収入を得るためと交流人口の拡大のために観光客（平成 18 年度は約 5 万人）の倍増に向けた施策も始まっている。その一つが島に自噴する「拍子水（ひょうしみず）：炭酸水素塩冷鉱泉、水温 23.6℃、ph6.5」を温泉として活用する試みである（既に姫島村健康管理センターでは拍子水温泉として使用している）。

これに加えて、村で産する黒曜石は石器時代には生活の必需品（鏃やナイフ）として各地に伝搬して使用されてきた。その石が平成 19（2007）年 7 月 26 日に文部科学省から、国指定の天然記念物に指定されたこともあり、島全体が歴史と地質標本の島（化石、藍鉄鉱、各種岩石分布の仕方、褶曲などの地質現象が具に見られる）と言えるようになっている。さらに、最近では 1,000km 以上の距離を移動する蝶であるが、その実態が明らかにされていないアサギマダラの中継地としても脚光を浴び、科学教育や環境学習の拠点としての動きも出始めている。

2. 各種施設

村最大の雇用のは役場である。平成 19（2007）年 12 月現在の役場職員は正規（118 人）、臨時（32 人）、嘱託（26 人）を加えれば総数 194 人（教委、診療所、介護施設、村営フェリーを含む）になる。この職員数を人口比で見ても、同規模の他市町村と比較しても突出して多いのが特徴である。従って何事も（課や係の縄張りを極力無くして）対応できるところは職員で行い、住民のニーズに直ぐに応える体制がとられている。そのため他の市町村と違って課や係の隔たりなく、対応した職員が直ぐに対処するため住民には大変評判がよい。しかし、職員が多い分だけ給与面は他市町村職員の約 70％と低く設定されている（ワークシェアリングの実施）。この他に 10 人を越える事業所は小、中学校、農協、漁協と海老養殖場だけで、残りは殆どが従業員数名以下の零細企業が自営業である。

村内の交通手段は島そのものが狭いこともあるが、2 輪車（361 台）、軽自動車（859 台）、普通車（561 台）を所有している（3 人に 2 台の割になる）。島外へは 1 日 12 往復（5:50 ～ 20:05）の村営フェリー

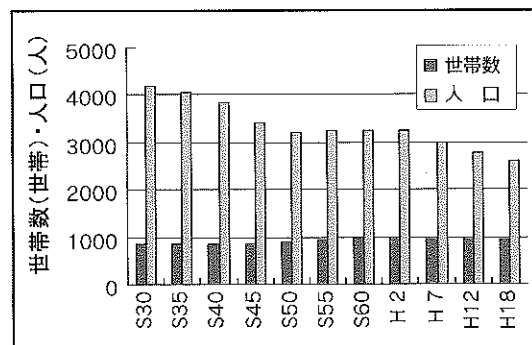


図 1 姫島村の世帯数と人口の変化

(200t) が就航しており、片道 20 分で (料金は大人 550 円) 島と本土を結ぶ。その乗降客は唯一の交通手段となっているため、平成 19 (2007) 年の日平均利用者は約 880 人、うち 76% (うち通勤通学の定期利用者は半数を占める) が村の住民である。しかし、ここ数年の学生定期や通勤定期は減少傾向にある。ただ、8 月 14 ~ 16 日は無形文化財ともなっている盆踊りがあるため、3 日間で 1.5 万人もの人々が島を訪れている。

3. 教育環境

上述の環境の中で、教育関連施設は村立の幼稚園 (2 学級 20 名) 1、小学校 (6 学級 116 名) 1、中学校 (3 学級 77 名) 1 があるだけで、その他の教育機関はない。() 内の数字は平成 19 (2007) 年 4 月現在の在籍者数を示す。そのため中学を卒業した者は対岸にある県立双国高校に自宅からフェリーを利用して通学している者を除き、殆どが村を離れている。かつては中学を卒業すると漁業に従事する者も多かったが、ここ 20 年程は生活の安定や新しい生き方を求めて村外に出て、高校や専門学校へ殆ど全員が進学している。しかし、村内には上記の学校以外に自ら学ぶための塾や教室などがないため、生まれてから中学卒業まで同じ狭い島内での生活のため (図 2)、何かによって一度順位が決まれば全てに波及し、仲間意識が先に立って競争心を持ち難いなどの理由がある。それ故、平均的な学力 (全国標準診断的学力検査や平成 15 (2003) 年から始まった基礎・基本の定着状況調査、平成 19 (2007) 年実施の全国学力・学習状況調査等の結果) が低く、高校進学等にてこずっている現実がある。その上、

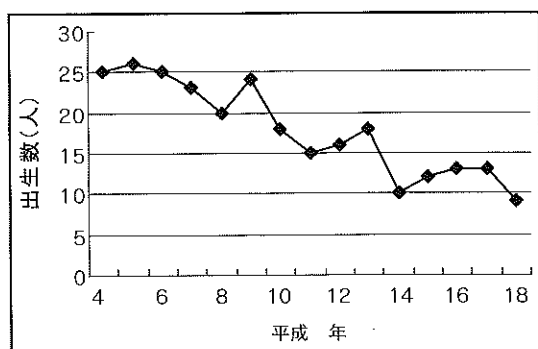


図2 姫島村の年別出生数

平成20(2008)年度からは県立高校の学区制が廃止され自由校区となるため、更に困難となることが予想される。

その様な理由から中学校と村教委は生徒の基礎学力向上を目指した様々な事業を数年前から積極的に導入し、そこに筆者が関わり大学生と共に各種手法による支援を続けてきた。その結果、学力面は言うに及ばず様々な効果が認められ、中学校教師は勿論のこと保護者や島民から継続実施の願望が非常に高いため、一週間に亘る「夏休みふれあい学習会」が毎年継続して開催されている³⁾。

・若者宿など

余談ながら島には「若者宿 (村では『ワケエモンヤド』と発音するが『ヤド』と言っても通じる。以下「宿」という)」と呼称されている各種活動や社会奉仕を行う組織が大正5 (1916) 年まであった (それ以降青年団活動と呼ばれているが、精神は継承され現在に至っている)。17 歳になると若者は全て地区内にあるどこかの集会所的色彩を持つ宿に出入りして村のしきたりや挨拶、日常生活の全てを学んだという。そして若者達は一致協力して村祭りや盆踊りの準備、夜警、道普請、台風や嵐時の警備、遭難船の救助等で活躍した。その宿には人望のある世話のできる夫婦が選ばれた。そしてその宿の主人は親代わりとなって若者達の面倒を見、時には苦言や仕事の仕方などまでも指導したという。また、この他に「娘宿」と呼ばれる女性だけの組織と宿泊所も大正の中頃まであったという²⁾。この様に2種類の宿は社会生活の場であり、人として生きるための基本を学ぶ所であった。村ではこの宿の良さを後世に繋げようと、青年団活動の中に組み入れ、それに近似した活動を継続している。

しかし、戦後の昭和 20 (1945) 年代以降、価値観の変化や日本の高度成長に伴い島から出ていく者が出始めた。同時に、高校への進学者が増えてくると共に宿への参加者は減少してきた。特に最近 は公民館が宿として機能しなくなってきたことあり、少子化と稼働率の減少に伴い数カ所あった公民館も統合された。今では多機能（避難所兼会議室、憩和室、和室等）を持った中央公民館「城山」（面積 430m²）が平成 2（1990）年に完成し社会教育の場や集会所として利用されているが、かつての宿のような共同生活や社会教育の場ではなくなっている。

島の数十歳以上の方々はその時の良さを知っているせいか、各人が過ごしてきた時期を回顧しながらこの種の社会教育の必要性を認め再構築を望んでいるが、その実現に完全には至っていない。

4. 各種事業

平成 15（2003）年以降に姫島中学校で実施された各種事業を表 1 に示す。これから判るように毎年複数の事業が行われている。その中で数年以上継続しているものは村独自事業と大分県事業の水産教室だけである。後者の少年水産教室は村から 170km 離れた佐伯市の県立マリンカルチャーセンターで開催されているもので、遠距離移動のため半日を費やす。それ故、1泊2日で実施される。しかし、これは島から離れて実施されるので、視野を広げるのに好都合である。その他の事業は単日で行われるため、1週間もの長期に亘るものは「夏休みふれあい学習会」だけである。この学習会は平成 15（2003）～16（2004）年度に実施された表 1 の⑤放課後チューター事業（文部科学省予算）が好評であったことを受けて、平成 17（2005）年度から村単独の予算で運営され今日に至っている。

平成 19（2007）年度もこれまで同様に大分大学の学生が支援者として参加して開催した。その際、平成 19（2007）年度からは平成 15（2003）年に始まったこの事業に、教えを受ける側の中学生として参加した姫島中学校出身者が高校を卒業して大学生となったこともあり、その学生がこれまでの手法を一部は踏襲しつつ学力支援員（チューター）の一員として加わり、学習支援を行った（大海智彦等）。この新たな支援者として、来年度以降は更に多くの島出身の大学生が加わるよう、教委や筆者を中心にして準備を始めているところである。これが上手く機能してくれば、新しい形（循環型）の人材育成として有効に働くことになり、今後の成果が期待できる。

本報では上述の環境にある姫島中学校生徒の意識改革と学力向上のために、大分大学生だけではなく島出身者が新たな学習支援員となって実施した 1 週間にわたる「夏休みふれあい学習会」に係る実施の様子や生徒、本学からチューターとして参加した学生、保護者、教師、教委、地元住民の関わり方について概説する。それを通して数年前から今回まで、この事業に参加した多くの学生と生徒の交流の様子、生徒や保護者のこの事業に対する期待と実施後の変容について紹介する。この企画と実施に本学から唯一参加した筆者からみた事業のあり方、実施の問題点や改善点、これからの独自の学習支援を兼ねた人材育成のあり方について述べる。

II. 経緯と提案

この「夏休みふれあい学習会」を開催する契機になったのは幾つかの条件が重なったことによる。これを時間軸を基にして以下にその経緯を述べる（表 1 参照）。

表1 姫島中学校での年度別実施事業

事業名(事業主)	実施年度				
	平成15	16	17	18	19
①少年・水産教室(県・村)	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
②福祉・職場・古里教室(村)	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
③ヘルスサポーター事業(村)	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
④学力向上F事業(文科省)	-----	-----	-----	-----	-----
⑤チューター事業(文科省)	-----	-----	-----	-----	-----
⑥学力パワーアップ事業(村)	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
(別名:夏休みふれあい学習会)					

姫島中学校では学力向上のために平成14(2002)年4月から3年計画で、文部科学省の推進する「学力向上フロンティア事業(以下F事業と呼ぶ)」を導入し、「確かな学力」と「生きる力」の定着と向上を目標に取り組みを始めていた。それに呼応するかのように姫島村教委は村議会に独自予算を計上し、平成15(2003)年度から新規に「学社連携基礎学力パワーアップ事業(UP事業という)」を開始する準備を整えていた。そ

こに平成15(2003)年2月、文科省の新たな「放課後学習チューターの配置等に係る調査研究事業(以下T事業という)」の募集が始まった(F事業とUP事業の詳細については参考文献3)を参照)。しかし、これは題名のように「放課後、教員を目指す学生が学校現場の担任や教科担当教員と協力して、きめ細かな個別指導を行い、児童生徒のつまずきの克服や学習意欲の向上と学ぶ習慣の定着などをはかること」をねらったもので、これを文科省は都道府県教委に委嘱し実施したものである。それに基づいて大分県教委がその実施校を募集したにも拘わらず、大分県内のどの学校からも応募がなかった。

実施校がないことに困った県教委は、これまでの様々な経過を踏まえて姫島中学校に限り受け入れを依頼し、やっと実現した。しかし、同校は大学から100kmの遠隔地であるうえ、フェリーへの乗り継ぎなどをしなければならず、少なくとも片道3時間(以上)が必要となり放課後に行くことは時間的に不可能である。それ故、県と村教委が中心となり文部科学省と何回かの折衝の末、夏期休業中という変形した形のT事業として、許認可された経緯がある。

当時このT事業の実施校は43都道府県の284校が指定を受け、九州地区からは現在の8国立大学法人と2私大が参加し、小学校31校、中学校14校、盲学校1校、合計46校で実施された。各県とも実施校としては複数校あるが、大分県は姫島中学校の1校だけであった³⁾。

従って、この「夏休みふれあい学習会」は前述の様なF事業やT事業とUP事業とを重ね合わせて同時に実施した紆余曲折の遺産でもある。そのため数回にわたる県や村教委、中学校、筆者の協議を行う必要があった。それが基になってお互いの考え方や目的、実施の方法などの相互理解ができ、県や国の事業終了後、つまり3年後の平成17(2005)年からは村独自の予算だけで、村教委、中学校、大学生と筆者が協働し、「夏休みふれあい学習会」の名の下に継続し開いてきたものである。

参考までに平成19(2007)年度に実施した学習会の日程を表2に示す。内容や時間が実施年度によって一部異なることがあるが、全体的に見れば5年間の差異は殆どない。これは実情に合うように改変工夫されて集大成されたものである。したがって、今後はほぼ確立されたこの手法を基本にしながら、必要により実状にあったように変更しつつ指導していけば良い。

その指導にあたる者はこれまで大分大学の学生10人程がわざわざ島に出掛けてであったが、今後は島出身の各大学に所属している学生達が夏休みを利用して島に帰り、島の後輩である中学生を指導すればよい。そうすることで島の自宅(親元)から指導に出向くことになり、大分大生のそれに比べて時間、経費、宿泊先、食料、台風などの際の対応等を考えずに済み、前述の全てにおいて簡単になってく

表2 平成19年度姫島中学校ふれあい学習会実施表

時刻	初 日 平和集会 (8:00 ~)	2~6日目 Tと打ち合わせ	最 終 日 Tと打ち合わせ
8:00	教育相談：個別	英・数・国 (80分)	英・数・国 (60分)
9:00	10:10 姫島港着	交替して実施	
10:00	打ち合わせ	数・国・英 (80分)	理・社 (60分)
11:00	昼食 12:45 開講式	昼食・昼休み	
12:00	英語 (50分)	国・英・数 (80分)	昼食、閉講式
13:00	数学 (50分)	交替して実施	姫島港見送り
14:00	自主企画*	自主企画又は	
15:00		ふるさと教室+	
16:00	懇親会	夕食準備	
17:00	バーベキュー	夕食片づけ	
18:00	寺小屋	寺小屋	
19:00	教科書や問題集など5教科の不明箇所を質問・解答など		
20:00	帰宅・準備	帰宅・準備	
21:00			

*自主企画は生徒と学生の自由な内容と方法で実施（水泳や実験教室が多い）
+ふるさと教室は地域連携による、主として盆踊りの練習など

る。特に、現在村予算で実施しているこの事業費も半減でき、昨今の自治体財源の苦しい役場（村教委）にとっては願ってもないことになる。その上、島の出身者（大学生）は後輩達の良き目標や憧れの対象として、学生は後輩達を教えているという誇りを持つことになり、お互いにとって好都合となる。この支援体勢が確立されてくれば、かつての若者宿のように先輩が後輩達を指導し、面倒を見、それが継続することで循環型の人材育成へ繋がることにもなる。その形の人材育成が確立できれば、これこそが新しい村興しへと繋がる。

幸いにここ数年は島の出身者で大学進学者は毎年2～4名あり（村教委の調査より）、4年間の在学だとすれば10名を越える大学生が支援事業に参加できることになる（大学院進学者もあることからそれ以上の人数に）。更に、8月は島にとって最大の行事である盆があり、これまで村の出身者は必ず島に帰ってきて盆踊りに参加する習慣があったことから学習会の指導者として、その一端を担当することができる筈である。

Ⅲ．事業の効果

この事業の効果を間接的であるが、参加した各年度の生徒、保護者、指導者として参加した学生の意見や感想などを以下にまとめて記す。その際、余白の関係から長文は筆者が省略した（その箇所にその旨記載してある）。その一部は先の拙稿（参考文献3）にも載せてあるので合わせて参考にされたい。

生徒A女

1週間一緒に過ごして、最初はちょっと話せなかったけど、だんだん慣れて、勉強も遊びも楽しんできました。私は1次関数が苦手だったけど、大学生に教えてもらったら、とてもわかりやすく、すぐに解けるようになりました。特に英語は今まで以上にわかって「ここは、こうしたらまだ簡単よ」と言ってくれたりしました。遊びもすっごく楽しくて、いうことなしです。兄ちゃん、姉ちゃんのようにだったので、別れがつかったです。でも電話番号も教えて貰えたので、困った時には質問もできるし、何でも話せて聞いてくれるので安心です。

生徒B女

1週間はあっという間だった。最初は「休みなのに学校に出らんと悪りいし、だりーな…」と思っていた。だけど、1日1日と日が増すごとに「勉強が楽しいなあ」って思えたし、「これからまだまだずっと一緒に勉強したい」と思えるようになってきた。そしたらもうお別れだ。寂しくなる。だけど、たくさんの思い出を作ることができた。勉強の仕方も解るようになってきたし、またメールで話せるし、解

らん所は聞けるし……。大学生の人たちって結構勉強してる、私もそうになりたい。

最後に港で見送りをした時私も友達も皆泣いた。この学習会がすごく思い出深い1週間となった。

生徒C男

暑かったけど大学生と一緒に勉強し、海に行って泳いだり遊んだり、最高に楽しい1週間だった。最初は苦手な数学で絶対に解けないと思っていた問題も、大学生に教えてもらって簡単にできるようになった。また、得意科目の英語では、難しい応用問題にもチャレンジすることができ、今まで以上に英語に興味がわいてきた。これからも、ここで学んだことを生かしてやっていけば、成績も上がると思う。勉強に自信がついた。俺も高校から大学に行って色々やってみたい。

生徒D男

夏休み前、大学生が来て一緒に勉強するのを皆はすごく嫌だと言っていた。ぼくもそう思っていた。でも、最初の日勉強やバーベキューで楽しくなった。休み中に学校に来る時間は増えたけど、出て来るのがおもしろくなってきた。ふれあい学習会、実験、寺小屋、水泳など1週間がものすごく早く過ぎた。大学生とまた勉強して遊びたい。僕にとっては本当に充実した思い出に残る楽しい夏休み中の学習会だった。

生徒E女

ふれあい教室が8月5日から始まって、初めはいやだなあーと思っていた。でも、学習会が始まるとおもしろくなり、一緒にバーベキューをした時は話しても最高。それに、明石海水浴場に行って、ビーチバレーをして泳いだりしたけど大学生のうまいのにびっくり。夜は寺子屋学習をして、分からないところは教えてもらえすごくよかったです。分からないところが分かるようになって、今まででサイコウの思い出になった。1週間っていう時間が長いのか短いのか分からないけど、すごく楽しかった。「また、いつかどっかで会いたい。盆踊りの時に遊びに来て下せい。」

生徒F女



写真2 1週間分の荷物を持ってフェリーで姫島港に着いた学習支援の大分大学生

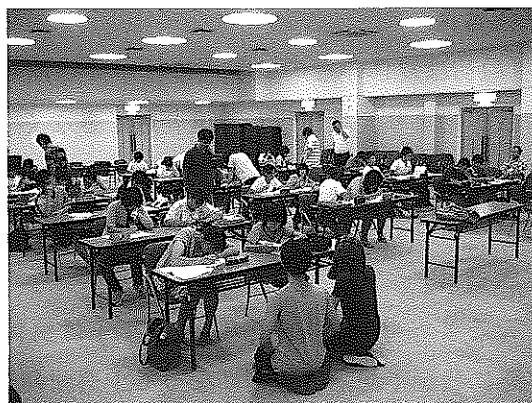


写真1 離島センターでの寺小屋学習

1週間、大学生と勉強したり遊んだりした。でも、はっきりいって、最初は乗り気じゃなくて「何で大学生と一緒に勉強せんと悪いん!!」と思った。でも、日に日に学校に行くのが楽しくなって、夜の寺子屋とかは早く行きたいと思うようになった。大学生は、自分の兄ちゃんや姉ちゃんみたいで、とても気さくで、勉強も先生より聞きやすかった。1週間でお別れとなって、さみしくなったけど、本当に楽しかった。これまでの夏休みの中で一番の思い出になった。

保護者 A

「最初は夏休みなのに学校に行って勉強せんといけん、だり～」と文句を言っていた娘だが、いざ学習会が始まり、2日目からは朝起こさなくても自分から起きて、全く別人のようにいそいそと出掛けた1週間だった。余程、大学生と気が合ったようで、食事の前後には多くの話をしてくれた。これを機に勉強の仕方が解って、自分だけでやるようになって欲しいものです。

保護者 B

ここ2～3年、姫島中学の3年生は夏休みになると大学生と共に勉強会をすると聞いていたが、実際に我が子はその時期になって1週間朝から夜まで参加した。その間は学習だけではなく色々な遊びも組み込みながらの企画で、学ぶことの楽しさを教えて貰えたらしくこれ程充実した子どもの姿を見たことがない。この企画を毎年続けている学校や教委の方々、実際に子どもを指導してくれている学生さんや大学の先生に感謝しています。

平成 15 (2003) 年度参加者の感想 (学生 A 女)

8月5日 今日では5月から話が出始めた「姫島村 夏休みふれあい学習会」の初日。早朝6時に大学を出発して、9時過ぎに伊美港に到着した。姫島村を訪れるのは初めてで、どんな所かととても楽しみだ。フェリーに乗るのも高校以来で、旅行に行くようなわくわくした気持ちとなる。着いてみると景色の美しさにまず感激した(写真2)。離島らしくほのぼのした雰囲気がとてもよい。

初日なので、先生方との打ち合わせの後に対面式があった。生徒も学生も同じくらい緊張しているのがよく判った。私の担当する生徒は打ち合わせの際に、先生から「おとなしい生徒」と言われていたもので、会うまで上手くやれるか心配だった。しかし、会ってみるとすぐに馴染んだ。

今日の学習では数学と英語を主に教えた。この2教科は私にとっても中学、高校と悩まされた教科だった。今でも苦手意識が強い。だから、生徒達が苦手だと感じる気持ちはとてもよくわかる。私はその苦手意識を克服できないままここまで来た。そのことをとても後悔しているので、島の生徒には今回の機会を有効に使って、頑張って欲しいと思う。(中略)

8月9日 今日の午前中、英語の時間に OBS 大分放送の TV 取材があった。「普通にして」と言われても無理で少し緊張した。生徒はもっと緊張したらしく「目はこっち(プリント)を向いていても、気は向こう(カメラ)にいていたわぁ」と話していたのがとても印象的だ。

午後は盆踊りの練習に参加した。姫島村はきつね踊りがとても有名だ(無形文化財)。ここに来て知ったことだが、きつね踊りはある特定の地区だけの踊りらしい。練習では島のお年寄りが暑い中を丁寧に教えてくださった。私は今まで盆踊りに一度も参加したことがない。ここに来て初めて踊りに加わりリズムに合わせて身体を動かしてみるととても心地よい。盆に来て実際を見たいものだ。

やっと生徒の性格や心がつかめ学習内容が深められそうなどころまで来たのに、明日でお仕舞いだ。とても残念だ。せめてもう数日あれば、もっと充実したものになると思う。(後略)

平成 16 (2004) 年度参加者の感想 (学生 B 女)

(前略) 毎日の学習会の中でだんだんと私も生徒も学習の雰囲気に慣れ、休憩を入れながら集中して

取り組むことができるようになってきました。また寺子屋の活動を通して普段話さない生徒とも話すことができました。これまで5日間の反省を生かし、英語では学生同士が何度も学習の構想について話し合いながら生徒に力を付けさせることができる展開を考えたり、数学では休憩と問題を解く時間との気持ちの切り替えをしっかりとさせることができるようになり、慣れてきたため質問も出るようになりました。残り2日という限られた時間の中で、生徒に1つ以上「これができるようになった」と言えるものを持って欲しいと思っています。また、私もそのためにできる限りの支援を行っていきます。そして「あと2日」と思うと、今から島を離れることが寂しく感じられてなりません。(中略)

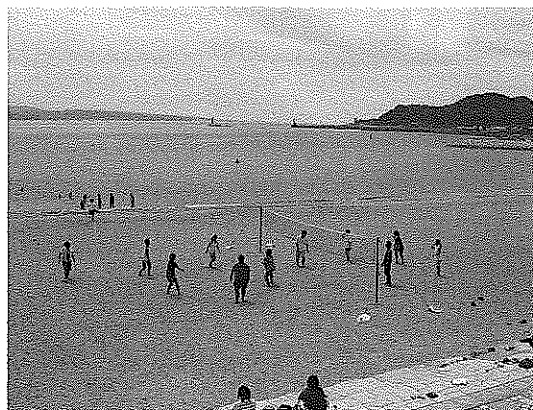


写真3 午後は学生と生徒による自由企画のビーチバレー等をし、交流が進んだ

今回7日間姫島に行って学習の仕方を教えてきましたが、実際には私も生徒と共に学んできたと感じています。この間にいろいろなことがありました。初めて会う生徒に教える科目は高校の頃苦手であった英語。また、これまで人に教えたことのない国語もありました。私が文系科目は得意ではないため、これまで英語・国語・社会を教えるということは避けてきました。しかし、学生の子でありながら「先生」と呼ばれる手前、適当なことを言う訳も、自分が苦手だからといって逃げる訳にもいきませんでした。また、初めての学習指導、数年ぶりの海での水泳、盆踊りの練習。どれも姫島という場所に出向き、学生皆で連携協力したからこそできた貴重な体験であったと思います。

毎日のふれあい学習では班分けされた少人数の生徒たちに対してゆっくりと各人に合ったペースで進めることができ、生徒が解けなかった問題も少しずつですが解るようになっていきました。私たちがこの期間でできたことは勉強の方法や考え方を少し教えただけで、生徒達の成績を直接伸ばせるようなものではなかったかも知れません。しかし、重要な点はしっかり伝えているので、今後各自で努力してこの学習会で得たことを生かし、これまでできなかったものを解決・克服してくれたら嬉しい。

寺子屋では多くの生徒と関わった。特に理科の問題の解法を教えた時「分かりやすい、よく解った」と言ってもらえたことが理科を専攻している私としては本当に嬉しかった。

姫島での学習会は生徒以上に私自身にとって勉強になる一週間でした。大分市内では経験できないことが多くあり、純粋な子供達に囲まれて先生と呼ばれて過ごした時間は大変貴重な一週間でした。そして教えた生徒が受験に向けて頑張ろうと思うように、私も今以上の勉学を続け、本当に学問的にも人間的にも「頼りになる先生」になれるよう努力しようと改めて思いました。

平成 17 (2005) 年度参加者のレポート (学生 C 男)

— 第 1 日 — 今日から姫島で少人数による学習指導をおこなう。去年、同じように高校受験を控えた中学 3 年生を家庭教師という立場で 1 年間指導したので、その経験が多少なりとも役立つと思う。また、今回は少数 (3 人) 学習なので、付属中での教育実習のような 40 人規模の指導とは大きく異なる。少人数学級による学習は以前から関心があったことなので、この 1 週間の学習指導での成果を十分に

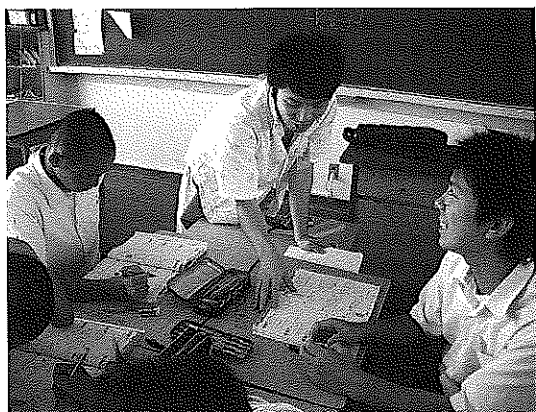


写真4 午前中は少人数による個別指導

検討し、今後の自分にとって意義のあるものにしたい。

今日は初日のため学習指導は2時間だったが、最初自分が思っていた以上に生徒は学習に対して前向きで、まじめに取り組んでいたことに驚いた。しかし、明日からはこれまでの教育実習の経験から、中学生でも50分間連続の集中力は持続しないことがわかっているので、適度に休憩をはさみつつ効率よく学習できるように心がけたい。

姫島中学生の印象としては第一に年齢の割には幼く感じられる。環境が人間をつくるということはかねてから

感じていたことだが、私の中の中学生のイメージとは大きくかけはなれていたため、対応に戸惑うこともあった。次に、先にもふれたが学習に対しての姿勢が思っていた以上に積極的である。学習指導をおこなう際、指導する側としては本人にやる気がないのが最もやりにくので、今回の学習指導は自分次第で大きな成果があげられると思う(写真4, 5)。最も、これは自分のグループの3人に限ったことなので姫島の全生徒にあてはまるかどうか定かでない。

明日からの課題として、学習指導においては専門でない教科も含まれるので十分に予習すること、また、少人数学習で可能な「その子にあった指導」を効率よく行うために空き時間はできるだけ生徒とふれあい、性格等の把握に心がけていこうと思う。(以下略)

ー第4日ー 今日で日程の半分を終えた。学習指導においては自分として手応えを感じていると共に、いくつかの問題点も浮上した。ひとつは、3人という少人数においても3人それぞれ得手不得手の教科・分野があるため、学習の進行速度や到達度も異なり、3人同時に行う指導(問題の解説・基礎の見直し等)が困難である。これは、40人前後の1クラスに対しての授業においてはもっと顕著に現れる問題だと思う。今回は生徒の学習到達度・理解度を把握しながらの指導を心がけると共に、50分を有効に利用する術を、指導する側の自分が身につけなければならないと痛感した。もう一つは、やはりまだ慣れないのか、生徒が自分の理解できていないことや疑問に思っていることをはっきりと出せてない言えないことである。これについては生徒とたくさんのコミュニケーションをとること、また指導の際は生徒に質問等して、確実に理解しているかどうかを確かめながら学習を進めることが必要であろう。

今日の午後からは自主企画として、生徒と共に海水浴を楽しんだ。日程上、自分のグループ以外の子とは話す機会もほとんどないため、全員の顔と名前を覚えていないが、女の子は特に自分から話しかけてくる子が多かった。初日の感想でも挙げたが、海で遊んでいる様子をみていると姫島の中学生は素直で無邪気だという印象が強く残る。また、姫島では一学年が30人前後(今年の中3は28人)であるため、生徒たちは子どもの時から兄弟のように育っている。そのため、昨今の社会問題となっている「いじめ」等は、今の段階では存在しないように感じる。

ー第7日ー 今日でこの姫島での学習会を終えると思うと寂しくもある。昨晩は今日の理科実験のためほぼ徹夜であったが、実験は各班ともそれなりに上手くいった。今回は身近なものを利用しての実験をしたが、せっかくの機会なので大学にある器具を使用して(液体窒素や超伝導の実験など)、日常

とはかけ離れた世界を体験させるのも自然科学に興味を引かせる引き金になるだろう。

学習指導は先にあげた問題点は解決しておらず、今後の自分の課題となりそうだ。しかし、生徒たちの力（成績）は確実に伸びたと実感できる。一週間という短い期間ではあったが、もっと色々なことをこの先も伝えていきたい。

今回の姫島での体験は自分にとって非常に大きな収穫となった。今、教師を志し、それに向かって邁進している身であるが、時には教師というものを意識しすぎていたよう

に感じる。学校というひとつの社会の中で教師と生徒という立場、関係はもちろん重要であろう。しかし、教師も生徒もそれ以前に人間であり、結局は人と人の信頼関係のうえに成り立っていることをこの姫島で、中学生に教えられた。この一週間で中学生に対してのイメージや思いが自分の中で大きく変わった。この貴重な体験を是非、今後の人生に生かしていきたい。

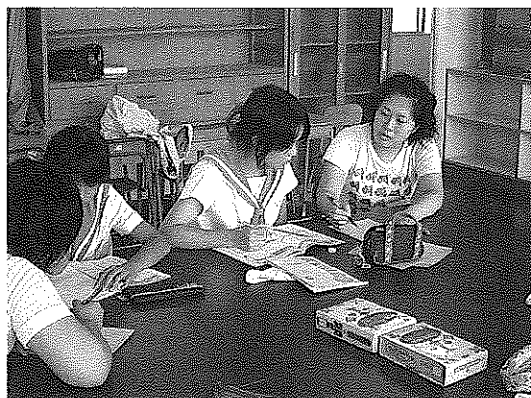


写真5 午前中はグループ毎の個別学習

平成 17（2005）～18（2006）年度 2年参加者の感想（学生D女）

昨年の姫島での7日間は私にとって非常に有意義なものであった。何より、毎日生徒に会えることがとても楽しみであった。今年は2回目の参加ということもあり1年前のような緊張はなかった。むしろ、前回あまり生徒と関わるができなかったので、今度は自分から積極的に話しかけて楽しみ、学習は基より生徒との心の通いをしようと思って参加した。

生徒たちは初めとても緊張していた。特に女の子が目立った。話しかけても一言二言しか返ってこなかったり、学習のとき質問も少なかった。また、今回感じたことがグループで学習しているにも関わらず、一人ひとりで問題を解き進める生徒が多かった。これができることは良いことであるが、質問をする雰囲気ではなくなっていた。分からないところは空白にして最後に答えを見て丸つけをするのが習慣になっている。

それで今年の学習においてはグループで学ぶことの大切さを伝えることにした。そのため、丸つけはグループで順に、ただ答えだけを言うのではなくその理由を説明しながら行なった。このとき、日常生活など結びつけ、できるだけ会話しながら進めた。そうすることで雰囲気は大きく変わった。解らないところはそのままにせず、質問をしてくるようになった。次は話の時間と学習の時間をしっかり作ることである。話の時間はできるだけ学校のことを聞いたり、筆者自身のことを話した。これにより生徒との距離は更に縮まり、学習の効果も上がってきた。初めは苦手なところを聞いても返事もなかったが、だんだん「ここが解らない」「覚えられない」と口々に言うようになってきた。

2日もすると生徒たちは「初め質問するのが恥ずかしかった。でも今は言いやすいし、この時間が本当に楽しい」と言うまでなっていた。私は学習の雰囲気作りの大切さを改めて感じた。「自分で答えを見て学習しても頭の中には残らない。しかし、自分で質問することで何が分からないのかが分かり、分かった時の喜びがある」と生徒の一人が話してくれた。私はこの言葉が本当に嬉しかった。

私は朝から夜まで学び遊び交流し、多くの生徒と話をすることができた。こんなに生徒と長い時間一

緒に過ごせたのはここだけである。生徒以上に得るものが大きかった、忘れられない2度にわたる姫島での学習支援である。今後はこの経験を教職に生かせるよう努力を重ねていきたい。

平成 18 (2006) 年度 参加者の感想から (学生 E 女)

(前略) 学習会5日目。離島センターでの10人分の食事の準備は、初日に比べ格段に手際もよくなり、圧倒的に短い時間での準備から片づけができるようになってきた。というのも、参加した学生が離島センターで寝食を共にすることで、お互いの個性が分かりそれぞれの得意な部分で力が発揮できるようになって、一段とチームワークと役割分担が出てきたからだと思う。それと共に、学生間の生徒に関する情報のやりとりがうまくいっているので生徒を包み込むような体制が整ってきた。そのため今では困ることも殆どなくなった。

午前中の少人数での学習は結構効果を上げていることもあり、明日で終わりということもあって休憩時間にいろいろな話ができた。この時、高校に入ったら子供たちがばらばらになってしまっていて悲しいという姫島なるが故の事情を知り、私も少し心を痛めました。でもこれだけ学習効果が上がっている学習方式は来年も続けてもらいたいと思います。

午後の自主企画の時間は島の生徒達と学生の為に、軸丸先生による身近にある材料を使っでの特別科学実験が行われた。やはり、先生は実験に精通していることもあって流れがしっくりしており、結果がはっきりと見て取れるものでした。実験の内容も生徒たちが学校の授業で見たことがないものばかりでしたが、基本は教科書の原理や法則を補完するもので生徒だけでなく、学生や見学に訪れた中学校教師にとっても目から鱗の感じでした。生徒は不思議そうな、でも好奇心旺盛な顔をして一生懸命見て聞いて、時には一緒にやっていました。先生の実験では実験をただ見せるのではなく、考えさせることで

生徒に学んで欲しいメッセージを伝えるという事がきちんと解りやすく、なるほどと思わせるもので、将に脱帽の思いで見た2時間でした。それ故に、先生の実験は私達学生にとっても大変良い勉強になりました。

夕方の2時間は盆踊りの練習です。姫島の狐踊りは有名ですが、実際にどういうものかを知る機会になりました。地区によって踊りが違い、その地区でしか踊れないものがあるということがとても興味深く、是非ともお盆に島に来てみたいと思いました(写真6)。ここで私が練習したのは「おてもやん」「どじょうすくい」「餅つき踊り」等で、初めは手と足を合わせるだけでも難しかったのですが、一つ覚えるとコツを掴み音楽や太鼓に合わせて踊れるようになりました。それも、生徒から教えて貰えたおかげです。

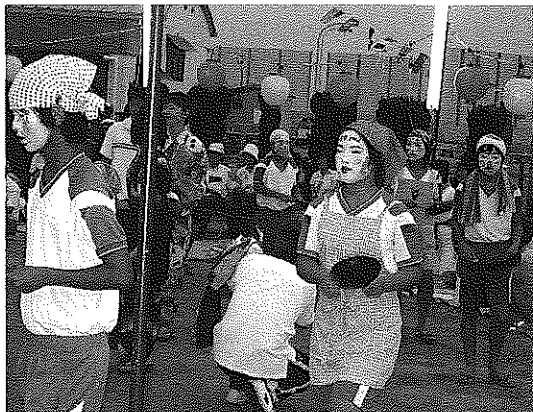


写真6 化粧をし盆踊りに参加した中学生

夜間に開く「寺小屋」は今日が最終日で、皆一問でも解けるようになると頑張っていました。私は数学の説明を中心に見回りをしました。その際、生徒によって説明の仕方を変えていることに気づき、それができるようになったと自己満足したものです。更に学習後、多くの生徒から「説明が分かりやすい」と言われた時がとても嬉しく、教師になりたいと改めて思いました。そして実際に生徒の力がついていることも判り、それもまた嬉しかったです。「寺小屋」に関する生徒の感想で、夏休みの間中「寺小屋」

(写真1)が続けばいいという意見もあり、この方法がそれなりの効果を上げていることが判り嬉しかったです。今回の学習会は勉強の仕方を学んでもらえたので、それを活かして高校受験に向けて頑張りたいです。そして困ったことがあれば相談にのってあげられるように自分自身を磨いていきたいと思っています。

平成19(2007)年度 姫島出身参加者の感想(学生F男)

私はこの学習会に参加する前は中学生との触れ合い方に対して不安と緊張を抱いていました。現在大学では工学部に所属しており、教育に関してはほとんど無知の状態でした。このような状態で教えることは中学校の先生にも、教育学部の大学生にも失礼になるのではないだろうかと考えていました。しかし、色々な場面で先輩が解りやすく説明し、優しく接してくれたことで肩の荷が下りました。

最初、私は中学生と友人のような感覚で関わりたいと思っていました。実は自分が中学生の時そうであったように、姫島の子供たちは人見知りも激しいですが、一度親しくなるとどんなことでも話してくれることはよく知っていました。したがって、上手くコミュニケーションをとり、興味を持ってもらうことで友人のように話すことができれば学習効果も上がるだろうと想像していました。

実際一緒に学んでいると、予想通り中学生も緊張しているように見えてましたが、私自身も同様にドキドキでした。その緊張をほぐしてくれたのは私の知っていた中学生が何人かいたことです。彼等は地元出身の私を見て笑みかけ、話しかけてきてくれたので大変救いになりました。それが同時に問題や回答について問いを出したり、話しかけ説明する際の良いきっかけにもなりました。また、私が中学生であった数年前にはなかったことですが、生徒同士の仲が実によいことです。これにはうらやましくさえ思いました。その上、勉強に集中したときの力には驚かされるものがありました。ただ、その集中力が切れる場面が多々あり、どうして集中力を持続させるかが重要な課題になってきます。

食事のときや午後のふるさと教室での盆踊りの練習では中学生同士が協力して、学年が一つにまとまっているのにも驚きました。これは私の時にはなかったことで、部活などで鍛えられたものであり、日々のコミュニケーションで作り上げられたものだと思います。これからの姫島のあり方を考えたとき、今彼等が持っている一体感を有効利用していけば凄い力になっていくだろうと感じました。

今後は姫島出身の大学生が主になってこの学習会を運営していくことになろうとしています。その際には私達が牽引的な役割を負うことになります。その折には大学入試の厳しさ、大学生活の楽しさと共に苦しさ、単位取得の大変さ、勉強やサークル活動から生まれる友達との信頼関係など、様々な経験を中学生に伝えていけたらいいなあとと思っています。また、大学生が姫島出身者なら中学生と学び遊ぶときに親しみやすさがあり、触れあい学習会が終わったあとでも何度も会う機会があるので、上手くこれを活かせば今後の姫島の活性化にもつながると思います。

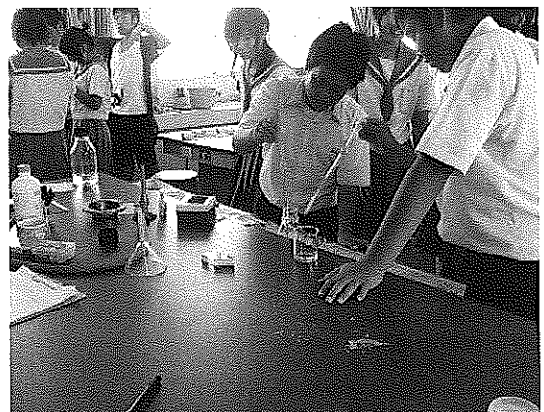


写真7 午後は生徒や学生が相談して自由企画による催しがある。これはその科学実験

毎日夜間に開かれる離島センターでの「寺子屋学習」は非常にうまく、集中できて中学生にも大学生にも良い刺激になったようです。これは今後も続けていくべきだと思います。今回初めて郷里のためのふれあい学習会に参加したことで教える側と、教わる側の両方の気持ちを同時に経験できたことが大きな収穫です。さらに、指導の際は臨機応変による対応の必要性を感じると共に応用力の不足を痛感させられたこの学習会でした。

今後は来年の学習会に向けて学友等を積極的に参加して貰えるような仕組み作りと、自分自身の学問的な力量の向上を図るための研究と学習を積み重ねていきたいと思っています。この学習会は単に後輩を教えるだけではなく、自身のこれからの生き方、学び方を振り返り、将来の村のあり方を考える良い機会になりました。

平成 18 (2006) ～ 19 (2007) 年度 2 年参加者の感想 (学生 G 男)

平成 18 (2006) 年の大学 3 年の夏、大分県で唯一の村となった姫島村を初めて訪れた。1 週間ではあったが、島の中学生たちと充実した時間を過ごせた。その夏の思い出は姫島一色であった。ただ、見知らぬ土地へ行き、初めて会う生徒に学習支援をし、理科の実験と一緒にするのは、楽しかったことと同じくらい苦労をした思いも残っている。だが、その種の苦労があったとしてもまた姫島へ行き、生徒たちと一緒に学びたい！あの 1 週間を終えた後に私はそんなことを考えていた。

そして昨年の思いは現実となった。平成 19 (2007) 年は経験者として初参加する後輩学生の支援を兼ねて姫島村を訪れることになった。ここでは 2 年目の姫島での体験を通して感じたことを述べる。



写真 8 港まで見送りに来た生徒(下)に応えて船上から手を振る学生(上)、思い思いの別れを惜しむ姿が見え、互いの顔面は涙に濡れている

私が強く感じたのは「経験する」ことの重要性である。一緒に参加した後輩たちは初めてのことでばかりで、自分のことで精一杯だという印象を受けた。これは昨年の私も彼らと同様に、周りを見る余裕がなかったと思う。割り当てられた生徒の学習指導をし、学校ではやらない理科実験を企画したりするからだ。そうするとやはり周囲(生徒や先生、地域の人等)とのバランスを保つことも重要である。だからといって初の参加者にそれを要求するのは高すぎる。自分のもてる力を生かすには自分のことに集中させる必要がある。

そのためには初めての参加者だけでなく、一昨年から始めた経験者を同行させる形が理想的であると思う。経験者は初参加の学生に力を発揮できるよう話す等、色々な形の支援を行うだけの余裕があるからだ。これは 2 年続けて参加し両者の立場を経験したことから自信を持って言えることである。

また、姫島で過ごした 1 週間が教師を目指す自分に

とって貴重な経験となったことである。実際に中学生を前にして、学習指導をしたり理科実験を行ったりすることは、教育実習を除けば稀なことである。日ごろ大学の講義等で学んでいることが、身につけているかを推し量るには、やはり実際に経験する以外にない。いくら知識に長けた者であっても経験した人には適わない。「知っている」だけと「やったことがある」には雲泥の差がある。そして、知り得た知識を自分のものにするために経験することが必要なのだと言える。教師は「教える」ことが使命だが、知識だけの伝達であれば教師でなくとも可能だ。そこに「経験」という深みを持たせて伝えることこそが「教える」という営みではなかろうか。それを成せるのが教師であり、そこに教師の魅力が生れてくると思う。

「現代の子どもは体験や経験が不足している」とよく言われるが、その一因として教師（のみならず大人）の体験、経験不足が大きく影響しているのではないか。教師を目指すものとしては色々な場所で様々な経験をし、人間性を豊かにすることが必要である。姫島での学習支援は子どもたちの学力の向上のみならず、教師を目指す学生にも多くの効果をもたらすものである。今後、この学習方式は少しずつ変わるであろうが、この事業が長く続いてほしいと願わずにはおれない。

この他に中学校教師、県や地教委等のこの学習会に対する高い評価があるが、紙面の関係からここでは省略する。前載のように過去5年間の事業は何一つ否定的な意見はなく、この試みを前向きに評価するものばかりであることを敢えて付け加えておく。

この学習会が終わり、閉会式では僅か1週間の学習にも拘わらず中学生も学生も、それぞれに別れを惜しみ、励ましの言葉や感想などが一人ひとりから語られる。中には感極まりこみ上げてしまい涙声になって理解できない者や言うこともままならぬ者さえある。更に学生達が姫島港からフェリーに乗って島から離れる（帰る）際には、殆ど全員の生徒が見送りに駆けつけて来る（写真8）。その中には過年度の卒業生も加わることがある。そして互いに写真を撮り、時には記念品が渡される。そしていよいよ船が岸を離れる時には思い思いの言葉が行き交い、様々な動作で送られる。この時には殆ど全員（船上の学生や岸壁の中学生）の顔が涙で濡れている。将に惜別の情、筆舌に尽くし難しである。そしてお互いの姿が見えなくなるまで（学生はデッキに立ち、生徒等は岸壁から）大きく手を振って名残を惜しむ。筆者はこの光景を見る度に感動すると共に、学生達の学習支援は学力向上だけでなく、現在社会に欠けている心と心の交流にも貢献していることを実感する。

また、この他に学習会の効果だけとは言えないが（中学校教職員の指導、家庭の支援、自らの努力によるのが大なるを認めつつ）ここ数年来、姫島中学校の卒業生全員がそれぞれの希望した高校や各種専門学校に進学し、目標に向けて頑張っていることから推し量られる。その生徒の中にはかつて一緒に学んだ学生達に、進学先や自宅から解らない所の説明や問題解法の仕方を電話やメールなどで質問してることがある。また時には進路などの相談や色々な事についての語らいは卒業後も続いている。中には各種行事の際に生徒から招かれて島を何度も訪れている学生もあり、単なる教える者と習う者の関係ではなく、心の交流が継続している者もある。そのため、2年連続して支援のために島を訪れた学生の所には、かつて一緒に学んだ友人等と共に訪問や歓待がある。そしてお互いの再会を喜び、激励し合っている姿は見ていて微笑ましい風景である。

また、この中で特筆すべきは1年近く保健室登校を余儀なくされていた生徒が、学生が指導者となつて行ふ夏休み中の学習会に出たのを機に、2学期からは教室での授業出席が可能となり、高校進学を果たした等の実績もある。これは年齢差の少ないがために言葉では言い表せない、何か通じるものがあり、それが不登校者を学習会へと誘引したものであろう。教師では成し得なかった学生なるが故の、なせる業とでも言えよう。それが引き金となって学級への登校が始まったのである。

この他に学習会に参加した学生の意見や感想を羅列すると以下ようになる。

附属中学校とは違う生徒の学びの姿勢が判った。教えることの難しさを実感した。指導するには広く深く学ぶことの必要性を感じた。これまでの自身の勉強不足と体力不足を実感した。講義とは違う中学生の心理や考え方の一面がわかった。臨機応変での対応の必要性を感じた。

中学校教師の様々な生き方や姿勢が垣間見えた。中学校の先生方が教科指導とその助言をしてくれて助かった。この事業をやろうとする先生や行政の方々の熱意を感じた。地域住民や保護者から多くの親切をもらった。離島センターとその備品を快く使わせてくれ嬉しかった。親の子どもに対する気持ちが理解できた。離島と言えども一人ではなく多くの人々との関係で成り立っている社会を実感した。地域や環境の良さと同時に悪さも見えた。島の盆踊り（8月14～16日）に参加して、わざわざ学校で練習をする理由が分かった。

学生間の連携と強調の必要性を感じた。寝食を共にしたことで学生の個性の再発見に繋がった。他学科や他大学の学生との交流の契機になった。親元を離れて初めてそのありがたさを実感した。今後の生き方を考えるヒントを得た等々があるが、ここでは解説や意見を省略する。

IV. 論議

上述の効果の項で引用した感想から推して、5年間継続しての夏休みふれあい学習会は生徒、保護者、学校、地域、学生等それぞれに様々な影響（効果）を与えている。そして5年目の平成19（2007）年度からはその学習会に出席して一緒に学んだ生徒（中学生）が大学生になったこともあり、彼の出席を要請したところ快く参加してくれ、大分大学の学生と協調しながら役割分担して学習会を開くことができた。

これが引き金となり島出身の大学生が毎年2・3人ずつ加わってくれば、3年後には10人を超す人数が指導者として集まることになり、これまでのように大分から半日かけて島まで出向く必要がなくなる。従って、今後2・3年は学生と筆者で不足する分の人的支援を続けていくことで自主運営できるようになるはずである。その間に学習会開催から運営に必要な、これまでの経験を生かした各種方法を伝授すればよい。それを継続すると共に村教委と手分けし島出身の大学生に話を進め、参加者を集めて新しい形の学習支援の仕方を模索する。その様にして姫島村にあった手法を確立していくことで、村出身者による村（島）のための自主的な学習会になってくる。

そのことが村（教委）経費の負担減となり、それが新たな事業を生み出す原動力になっていくことになる。その学習会に指導者として参加した学生は自信がつき自身の誇りにもなるし、故郷へ錦を飾り、親元へも帰るため最近減少気味だと言われる親子や家族の会話も生まれことになる。

また、その学生から教えて貰った生徒は、大学生をあこがれるようになり、学ぶことの面白さや楽しさを知り、将来は自らが大学生となって後輩達を指導できるようになるために、一層勉強に励むことになってくる。この方式を今後数年継続して実施すれば、この手法が固定化し、確立されていくことで循環型の地域に根付いた教育となる。これが将にこれからの姫島村式「むらおこし」である。

筆者はこれを循環型人材育成塾と名付けて、長期展望に立った人材の養成を目指している。兎に角、この方式を最初の2～3年だけ続けて上手く誘導していけば、先述の若者宿のようにお互いに切磋琢磨し特定の者が音頭を取る必要もなく、自然発生的に人材育成ができるシステムが構築できる。丁度今が市町村合併をしなかったことに伴う変革の時期であり、役場、地域、支援者などの人材が揃っている。更に、この5年間実施してきた学習会の成果が住民や生徒などに認められている時でもある。今が絶好の機会であるが故に期待できる。これが上手く機能していけば島の将来を担う若者達がどんどん生まれてくることになる。将来的には島独自の学習支援方式が新たな様々なものへと発展していく可能性が大である。それが構築できれば中学生だけでなく小学生を含めた支援のあり方も派生する。今後の展開が楽しみである。そのために筆者等が関わっているところでもある。

ただ、島出身の学生を活用することは手法としては面白いが、果たしてこれまでの本学学生による支援の仕方と同じような効果があり、簡単に生徒の理解に結びつき、学力向上になるか多少の懸念がある。それは島出身大学生と言えども、学問的な力が個々人により大きく異なっていること。少人数ではあるが島を出て数年経過したことで、環境の異なる生活故に、その違いから来る学生同士の協力と連携した支援ができるかどうかにかかっている。

更に本学学生のように既に教育実習などの経験や心理学や教育学などを多少なりとも学んでいるか等幾つかの心配もある（本学の特に教員養成系学生の教育経験と学問は高く評価でき、この類の事業を行う際にはなくてはならない存在であるのは実証済）。だが、中学生より数歳上であるという若さ故に相通じる、人間的な触れあいもあることから推して筆者の懸念は払拭されるものと思う。そうでなければこの学習計画は成り立たないものとなる。参加者はそのための心づもりをして取り組んで欲しい。その際、平島⁴⁾の手法を姫島式に変形して取り込んでいけば効果は大きく上がる。

この事業の今後の具体的な進展については機があれば報告する予定であるが、この学習会が新しい形の人材育成へと通じることを祈念して止まない。

本稿はあくまでも最近5年間、夏休み中に実施してきた姫島中学校生徒のための「ふれあい学習会」の意見や感想を基にして、今後の少子高齢化した島の生徒のための学力支援のあり方と共に、それによる循環型人材育成の一手法とするための方策を述べたものである。この方式はこれまで何度か述べた拙稿⁵⁻⁷⁾のように中心となる特定の人物（リーダー）がいなくても、お互いが実践していきさえすれば可能となるのが特徴である。そして若者故に何十年という年月の先に（長い目で見て）、やっとその結果が見えてくるものである。でもその中から将来の村は自身で舵取りするという人材も早期に生まれてくる可能性も秘めている。

【参考文献】

- 1) 姫島村役場：大分県姫島村 2004 村勢要覧 及び 資料編 (2004)

- 2) 姫島村村史編纂委員会：姫島村史（1986）109, 114, 291, 348
- 3) 軸丸勇士他：大分大学生涯学習教育研究センター紀要 4号（2004）46-61
：教科教育学研究 第23集（2005）187-189
- 4) 平島由美子：大学の物理教育 12(4)（2006）69-73
- 5) 軸丸勇士：大分大学生涯学習教育研究センター紀要 1号（2001）39-48
- 6) 軸丸勇士：大分大学生涯学習教育研究センター紀要 3号（2003）33-46
：教科教育学研究 第21集（2003）215-229
- 7) 軸丸勇士他：大分大学生涯学習教育研究センター紀要 6号（2006）105-132

A New Challenge for Improving the Academic Ability of Students' on an Isolated Island ---Through A Five Years' Support Project---

ZIKUMARU, Yushi (The Faculty of Education and Welfare Science)

Abstract

Himeshima is one of the isolated islands in Oita Prefecture. For the past five years, they have been continuously carrying out projects for improving the academic ability of students' for one week in the summer holidays at Himeshima Junior High School, the only Junior High School established by the village. It was the students of Oita University who first supported the project.

The students who took part in the programs when they were junior high school students, being now university students, will start to support their new junior high school students in studies as volunteers (tutors) in 2008. In this paper, we introduce the new projects for the last five years and describe the way of training people as a cyclical process and our vision for the future.

[Keywords] junior high school students, university students, training people,
supporting junior high school students in their studies, circulation